2011 年度　文教大学生活科学研究所

公開講座記録

開講期間　第1・2回 2011年7月2日（土）
　　第3・4回 2011年7月9日（土）

開会の挨拶　研究所所長　神　田　信　彦
司会進行とまとめ　研修部主任　八藤後　忠　夫
　　研究部主任　星　野　晴　彦

テーマ「現代社会における結婚の意味」―“婚活”を糸口に―

“婚活”（結婚活動）ということばは、近年流行語大賞にノミネートされるほど世の中に広く使用され、今後さらに注目されるであろう。

そこで今年度は「現代社会における結婚の意味 ―“婚活”を糸口に ―」を主テーマに講座を企画した。

第一部（7月2日）では“婚活”の名付け親であり、ジャーナリスト・ライターとして活躍中の白河桃子先生が「“婚活”の名付け親から皆さんへ」と題して第1・2講座を講義する。“婚活”を糸口として現代社会における結婚について分析し、結婚の意味について皆さんとともに考える。

さらに第二部（7月9日）第3講座では結婚観と家族像について、人間科学部教授の佐藤啓子先生が「家族像の変遷と結婚の行方」と題して結婚における人間関係と家族像について講義する。最終の第4講座では文学部教授の謡口明先生が「論語に見る結婚観と家族像」と題して朗誦とともに解説講義する。

以上の内容で構成した講座を通して、現代社会における結婚や家族のあり方、さらには結婚における人間関係についてともに考え、学習する場を提供する。

第１回“婚活”の名付け親から皆さんへ―その１
第２回“婚活”の名付け親から皆さんへ―その２

“婚活”の名付け親が現代社会を分析する

文教大学生活科学研究所　客員研究員　評論家・ジャーナリスト
白　河　桃　子

“婚活”を糸口として現代社会における結婚について分析し結婚の意味について皆さんとともに考える。

第３回　家族像の変遷と結婚の行方

文教大学人間科学部人間科学科　教授　佐　藤　啓　子

はじめに

かつて結婚は、性的・社会的成熟度を示す１つの指標であるかのようにみなされており、男子は就職し、結婚すること、女子は結婚して子どもを産むことが一人前になることとみなされていた時代があった。20 代後半になっても独身でいる若者がいると、本人の都合や意志とは関係なく、周囲の者たちが心配しながらお相手を探し始めたり、紹介し始めるといった風潮もあった。このように、結婚は、子どもから大人になるための通過儀礼としての意味合いを持ち、多くの人々が結婚し家族を持つことが当たり前のことと考え、実行し続けてきた。

現代社会でも、そのように考えている人々もいないわけではないが、結婚や家族に対する考え方や在り方は変化し、多様化してきている。

現代社会においては、結婚しているかいないかということは、必ずし不利だとは考えられてはいないし、ましてや一人前になる尺度としての意味合いも持ってはいない。結婚はもっぱら個々人の生き方や好みや運命の問題として、結果的に個々人が選択した結果としてみなされている傾向がある。

本講では、過去から現在に至る日本の歴史的変遷の過程で、特に家族における男性と女性の立場から結婚の在り方や意味の変化を探り、次いで、現代社会における結婚観や実態の様相はどうなっているかについての現状に触れ、さらには、結婚や家族については、今後、どうなっていくのか、その行方を模索したい。

１　歴史的変遷過程に見る家族像と結婚の意味 ── 男女の関係を中心として ──

(1) **江戸時代**：保守と安定が求められた将軍による中央集権体制、階層秩序の確立と差別観、鎖国による国民の思想・宗教の統制下における不平等で不自由・没個性的で非創造的社会の出現（家と家の結婚、「家」の存続・継承を実行するために、女性に課された最大の任務として男子を出産すること、夫に隷属する妻、男性優位の家族・社会、他）

(2) **明治時代**：三権分立主義の採用、議会制度の導入、官吏公選制の採用、版籍奉還、廃藩置県、地租改正他、近代国家への脱皮、明治民法の交付（明治 29 年）イデオロギーとしての「家」制度の確立（学問へ情熱を注ぐ男性、学ぶ女性の出現、良妻賢母への期待・家庭教育）

(3) **大正時代**：好況期、独占資本主義の体制、大正デモクラシー：自由主義の風潮（社会に参加し、経済的に自立する女性の出現、自己能力を開発し、社会に還元する女性たちの出現、男女平等思想の萌芽、他）

(4) **昭和前期**：経済大恐慌、貧しい家庭生活・社会生活、文部省による「家庭教育振興方策（昭和５年）」、第２次世界大戦の勃発、国粋主義思想の統一（国家主義的家庭の推進、皇国の子女教育）

(5) **昭和後期**：敗戦、新憲法の樹立、建前的・形式的男女平等の形成、男女の合意による結婚、思想・職業選択の自由、高度経済成長下におけるゆとりある家庭生活・社会生活、社会進出する女性たちの出現、非婚化・晩婚化の始まり、他

(6) **平成時代**：家庭生活の変化、都市化・高学歴化・情報化・機械化・国際化等の社会的条件の変化（家族像の多様化、模索され続ける女性の自立：父母がともに参加する子育ての推奨、男女共同参画社会の実現へ向けての努力、他）

２　現代社会にみる「結婚」の様相

(1) 結婚の意識

① そもそも、「結婚」とは

② 結婚したい理由

③ 結婚したいと思う時

④ 結婚相手を選ぶ条件

(2) 統計に見る結婚の現状

① 結婚願望

② 婚姻数の推移

③ 年齢別未婚率の推移

④ 結婚への努力（婚活の具体的な内容）

(3) 現代社会における結婚観と現実の特徴

３　結婚の行方

(1) 多様化する結婚の形

① 内在型（優劣型）結婚：従来の性別役割分業体制にみられる結婚の形。主として、経済的収入を得ている一方が他方に優越し、他方が従属するという支配・服従の関係を維持しやすい結婚の形。

② 内接型（依存型）結婚：たがいに寄り添いながら、時に夫が誘導し、時に妻が誘導するというように、家庭内における中心が移動する形。何事も話し合いをしつつも、迷いながら決めていく結婚の形。

③ 接在型（自立型）結婚：双方が経済的に自立しながら家庭という場を共有し、家計・家事・子育て等、計画的に分担している結婚の形。

④　外接型（接触型）結婚：住む場所も、経済的にも独立し合っており、必要に応じて連絡し合ったり、出会い、絆を深めあっていく結婚の形。

⑤　外在型（隔離型）結婚：通常の形式にはとらわれない、自己の世界における結婚の形。何らかの事情で住む場所が異なったり（外国と日本、愛する人の事故死後もなお愛し続けているなど）会えない事情があっても、絆を深めている結婚（？）の形。

⑵ 今後へ向けての結婚の模索

前述いずれの形をとるにせよ、もし結婚するのであれば、どのような条件が求められるのであろうか。

①　結婚に関する自分なりの意識形成の必要

②　人として自立（精神的自立・経済的自立・生活身辺的自立）していること

③　関係を大切にできること（自分のみではなく、他者の身でもなく、家族や社会のみではなく、それぞれを活かしながらコミュニケートできること）

④　共に創る態度や姿勢のあること

⑤　その他

第４回『論語』に見る結婚観と家族像

文教大学　文学部中国語中国文学科　教授　**謡　口　　明**

１　孔子の父母の結婚と母の死

孔子生魯昌平郷陬邑。其先宋人也。（・・・・）叔梁紇与顔氏女野合而生孔子。（・・・・・）丘生而叔梁紇死。（・・・・）孔子母死、乃殯五父之衢。耶人輓父之母、誨孔子父墓。然後往合葬於防焉。（『史記』孔子世家）

「野合」諸説

①　史記索隠・史記正義・礼記檀弓疏

②　史記志疑

③　史記探源

２　結婚観

⑴ 子、謂公冶長。可妻也。雖在縲紲之中非其罪也。以其子妻之。（公冶長篇）

⑵ 子、謂南容。邦有道不廃。邦無道免於刑戮。以其兄之子妻之。（公冶長篇）

３　家族像

⑴ 葉公語孔子曰、吾党有直躬者。其父攘羊、而子証之。孔子曰、吾党之直者、異於是。父為子隠、子為父隠。直在其中矣。（子路篇）

⑵ 子曰、父在観其志、父没観其行。三年無改於父之道、可謂孝矣。（学而篇）

⑶ 子曰、弟子入則孝、出則弟、謹而信。汎愛衆而親仁。行有余力、則以学文。（学而篇）

『論語』に見る結婚観と家族像

平成二十三年七月九日（土）

文教大学教授　語　口　明

一、孔子の父母の結婚と母の死

孔子は魯の昌平郷の陬邑に生まる。其の先は宋人なり。（……）叔梁紇、顔氏の女と野合して孔子を生む。（……）丘生まれて叔梁紇死す。（……）孔子の母死するや、乃ち五父の衢に殯す。耶人輓父の母、孔子に父の墓を誨う。然る後に往きて防に合葬す。　（『史記』孔子世家）

孔子生魯昌平郷陬邑。其先宋人也。（……）叔梁紇与二顔氏女一野合而生二孔子一。（……）丘生而叔梁紇死。（……）孔子母死、乃殯二五父之衢一。耶人輓父之母、誨二孔子父墓一。然後往合二葬於防一焉。

『春秋左氏伝』に見える叔梁紇（字は叔梁、名は紇）は勇敢な大力無双の武人として記述されている。叔梁紇は魯の小邑耶の代官で、戦時には一隊を指揮した武将であったろうといわれる。

『孔子家語』によれば、「叔梁紇は魯の施氏の女と結婚し、九人の女子をもうけ、その第二夫人が孟皮を生んだ。孟皮は足が不自由であり、そこで顔氏に求婚した。顔氏には三人の女がいて、姉二人は父の顔氏の勧めを断り、末の娘徵在が叔梁紇に嫁いだ。」と述べている。

司馬遷は、この叔梁紇と顔徵在の結婚を、「野合」と記述したため、さまざまな説があらわれることになる。

① 叔梁紇が男子結婚の限界とされる六十四歳をすぎて結婚した。婚期をすぎているのを野合という。　（史記索隠・史記正義・礼記檀弓疏）

② 古代の婚礼は結納等をはじめとする儀礼が重んじられていた。一つの礼でも欠けると野合という。　（史記志疑）

③ 殷の契・周の后稷のように、母が燕の卵を呑んだり、巨人の足あとを踏んだことによって生まれた。つまり帝王や聖人は生誕に関して異常な出生をするという感応説を野合という。　（史記探源）

司馬遷が孔子の父母の婚礼を「野合」と述べた真意は、右に掲げた諸説の中で、どれを最適なものだと特定はできないが、世間で行われる一般的な婚礼とは異なったものだったとは言えよう。

母が死んだ時、母は父の墓所を教えていなかった。孔子は魯国の都の重要な広場である「五父の衢」（四方に通ずる大通り）で母の殯（死体を棺に入れ、葬るまで安置しておくこと）をした。これは人の注意を引くためであり、父の墓所を知っている人にめぐりあうことを願ってのことであった。

母の旧知の輓父（葬車を引く人）の隣人の老母が父の墓所を孔子に教えてくれた。そこで防に埋葬されている父の墓所に母を一緒に埋葬してあげたのである。

孔子の母への愛情は深い。後日のこと、弟子の宰我が孔子に、親のために三年の喪に服するのは長すぎる、自然界の移り変わりも、人間社会のいとなみも、みな一年をもって周期になっている、と言うて、服喪も一年で切り上げることを提議した。これに対して、孔子は、おまえの気持ちがそれで済むならば、それでもよい、と言い、そして、私は三歳のころまで父母の懐に抱かれていた、せめて死後三年のほどは親の愛をしのびたいのだ、と述べている（陽貨第十七）。ここに「父母の懐」という彼の意識の中心は、もちろん、母にあった。

孔子の温かい、謙虚な性格は、母親によって与えられたが、彼の肉体は、父親からゆずられたようである。

『論語』（全釈漢文大系）平岡武夫著　集英社

二、結婚観

（一）

子、公冶長を謂う。妻すべきなり。縲絏の中に在りと雖も、其の罪に非るなり、と。其の子を以て之に妻す。

（公冶長篇）

子、謂二公冶長一。可レ妻也。雖レ在二縲絏之中一　非二其罪一也。以二其子一妻レ之。

○　公冶長＝姓は公冶、名は長。字は不明で、生まれは魯国とも斉国の生まれだとも言われている。

○　縲絏＝罪人をしばる黒色の縄のこと。転じて罪人として入獄すること。

※公冶長は鳥のことばがわかったので、行方不明の幼児の遺体の場所を子どもの家の人に告げたことから殺人の容疑で入獄したが、最後に鳥のことばがわかることが立証されて放免されたという。

（皇侃の『論語義疏』）

（二）

子、南容を謂う。邦に道有れば廃せられず。邦に道無きも、刑戮より免る、と。其の兄の子を以て之に妻す。

（公冶長篇）

子、謂二南容一。邦有レ道不レ廃。邦無レ道免二於刑戮一。以二其兄之子一妻レ之。

○　南容＝孔子の門人。姓は南宮、名は縚、字は子容。南容は南宮子容を略して呼んだのであろう。

国家が正しい政治を行っているときには、ほっておかれることはなく、国家が正しい政治を行っていないときも刑罰にかかることはないだろうと、南容のことを評価された。孔先生の兄の娘を嫁にやられた。

三、家族像

（一）

葉公孔子に語りて曰く、吾が党に直躬なる者有り。其の父羊を攘みて、子之を証す。孔子曰く、吾が党の直なる者は、是に異なり。父は子の為めに隠し、子は父の為めに隠す。直きこと其の中に在り。

（子路篇）

葉公語二孔子一曰、吾党有二直躬者一。其父攘レ羊、而子証レ之。孔子曰、吾党之直者、異二於是一。父為レ子隠、子為レ父隠。直在二其中一矣。

○　党＝五百家の集落をいう。
○　直躬＝正直者の躬という人。
○　攘＝他家の羊が自分の家にまぎれこみ、こっそり自分のものにする。

葉の殿さまが孔子に話された。「私の住む国の村に、正直者の躬という人間がいて、彼の父が他家の羊を自分のものにしていた。息子の躬は役所に証人となり訴え出ました」

孔先生はこたえました。「私の村の正直者はそのようなものと違っています。父は子のためにかばい、子は父のためにかばいます。そこに（人情自然の）正直さがあるのです」

(二)

子曰く、父在さば其の志を観、父没すれば其の行を観る。三年父の道を改むること無きは、孝と謂うべし。

(学而篇)

子曰、父在観二其志一、父没観二其行一。三年無レ改二於父之道一、可レ謂レ孝矣。

先生がいわれた。「父が在世中には、父の志をよく観察して、満足してもらえるよう努力すべきである。父の死後は、父の業績や功績を観察し、死後の孝養に励むべきである。死後三年間、父のやり方を改めないのが、孝行者だと言えよう」

(三)

子曰く、弟子、入りては則ち孝、出でては則ち弟、謹んで信あり。汎く衆を愛して仁に親しみ、行いて余力有らば、則ち以て文を学べ。

(学而篇)

子曰、弟子入則孝、出則弟、謹而信。汎愛レ衆而親レ仁。行有二余力一。則以学レ文。

○　出則弟＝この弟は年長者によく仕えること。
○　学文＝この「文」は詩・書・礼・楽をさす。この詩・書・礼・楽の四つは、いわゆる文献の中で最も重要なものである。

先生がいわれた。「若者よ、君たちは家のなかでは父母を大切にし、家の外では年長者に従順におつかえし、どんなこともおろそかにせず信頼されるようにする。ひろく誰にでも愛情をもって接し、心あたたかな人とつきあう。これだけのことができたうえで、まだ余力があったら、そこで書物をひもとき、学びなさい」